



流星物質
MeteorGraphy

流星物質 MeteorGraphy 試し読み 目次

- ・ 純真ハートビート！ 鈴鹿川えなの憂鬱な健康診断 3
- ・ 5ねんごびゅあぶりーど 7
- ・ 憧 kiss Elder Side 8
- ・ 奥付 11

※Re:Dead Respect fot the dead girl

エア花嫁を俺にください あふたー は本誌で読んでね！

純真ハートビート!

鈴鹿川えなの憂鬱な健康診断

「……おはよ」

『おはよう』

僕・雲津三峰くもつみつみねの目覚めは彼女と一緒にだ。

鈴鹿川すずかがわえなに憑く幽霊となつてから、その非日常は変わらない。

今日はひどく寝起きが重い。いつもの低血圧はともかく、あまり寝付けなかったのが響いているのか、

「ねむいし、二度寝するねえ……」

『いやいや、起きようよ。学校でしょ』

「やだあ。今日いきたくない」

ばたーん。ぬくもりの残る布団に潜り込む。死にかけの睡魔ここぞとばかりに全力を振るい、抗いようのない世界に引きずり込まうとする。

『今寝たら確実に遅刻するぞ!』

「いいよ、今日は。ていうか、もう、寝よ……」

『今日に限って、でしょ。どうするのさ』

「だって、やだもん、健康診断」

そう。健康診断。一年に一回、一学期くらいにある、アレ。

僕が鈴鹿川えなの守護霊——と言うと「早く出たって

よ」と愚痴られるので思うだけにして——になってから半年くらい。

『すごい、今更だと思っただけど』

「何言ってるの!? 健康診断だよ? 恥ずかしくない?」

『言わんとしていることは、わかるけど……』

「もういいや、ほんと、今更だもんね」

眠気を振り飛ばし、ベッドから降りた。唐突にパジャマに手をかけ、一気に脱ぐ。

この僕が憑依してからというもの、鈴鹿川にプライベートというものは一切なかった。

着替えというオードソックスなシチュから、お風呂、果てはどうか彼女が体験する全ての感覚を僕は共有する。五感はもちろん、痛覚や眠気や食欲、感覚と名のつくものを全て鈴鹿川に依存している。

僕は一切自由も効かず、鈴鹿川の受信する感覚を受けただけ。唯一できることと言えば、彼女にだけ聞こえる会話ができること。それと、

姿見に映る、鈴鹿川の汗ばんだ肢体。

磨き上げられたボディに鼓動が高鳴る。

「ほんと、いつも見てるくせに飽きないね? アイドルとしては、嬉しいことなんだけど……」

今日は汗がにじんで、いつもよりもドキドキした。依存する感覚の中で唯一、感情だけは依存ではなく共

有という形になっている。

鈴鹿川が嬉しかったら僕も嬉しくなるし、逆もしかり。何か不快に思ったのなら、それは僕にも伝わるし、僕が怒るようなことがあれば鈴鹿川もそれを知れる。

だから、僕が鈴鹿川へのハダカを見てドキッとすると隠すことができない。

共有する、どきどきの鼓動。

そのまま上を脱ぎ捨て、ボトムスも履き捨てる。投げ捨てられたパジャマの上下は無造作にベッドの上で広がっている。

片付けが苦手なのか、単にものぐさなのか、いやものぐさなだけだ。部屋は読みっぱなしの雑誌やマンガにあふれ、試着してクローゼットに戻されることのなかった洋服が山を形成し、洗濯には出したものの回収して仕舞われないまま落ちている下着など……ファンが見たら落胆するか歓喜するかはつきりわかる具合の汚部屋なのだ。

僕が取り憑いたばかりの頃は僕の目気にして、男友達を呼べるくらいにはキレイになったのに、数ヶ月もしない内に混沌の様相を取り戻していた。

下着姿のまま部屋を出て、階下へ。そのまま台所に向かうと、ちょうど鈴鹿川母が出勤の支度をしていた。

「おはよ、おかーさん」

「おはよう、えな……ってまた下着姿で！」

「だって今日熱いんだもん」

人に見られるお仕事の反動か、はたまた単にものぐさなだけか……ものぐさなだけだ。

人の見てないところではとことん女子力が低い。女子力とはなにか？ さあ。少なくとも鈴鹿川には備わっていないと思う。

「食器ぐらいいは水に浸けておいてね。じゃあ、いってきまーす」

「はあい、わかっているってば。いってらっしゃい」

鈴鹿川母が出て行くとこの家には鈴鹿川一人だけになる。僕？ いないものとしてほしい。

「ただきまあす。早く食べてシャワーあびよ」

鈴鹿川と同じ味のものを食べる。

「健康診断とか、なんでするんだろーね」

『学校保健安全法で定められているからだよ』

「定められている理由きーてるの！ っていうかよくそんな法知ってるね？」

『昨日先生が説明してたけど？』

ちゃんと聞いてないな？ 聴覚を依存してる僕が聞いているんだから、聞いてないはずはないな？

まだ若干眠い頭を引きずりながらごちそうさま。

「もー汗でべたべた。そろそろお布団いらないんじゃないかな。シャワーあーびよ」

と、食器を片付けなままお風呂場に向かう。
びた。

「……だから健康診断はイヤだって、言ってるのに」

『そんなこと言いましたも』

一階の廊下の半ばで踵を返し、あえて見ないように通り越したドアの前に立つ。

『……』

「何か言いたそうだね？」

ドアノブに手をかける。

『……用意は？』

「何のことかな？」

ドアを開ける。

『後から提出になるだけだしさ、早めにしておいた方が』

「もー！ わかってるよ！ こんなに恥ずかしい思いしてるの誰のせいだと思ってるの!？」

ドアノブから手を離し、床を踏み抜く勢いで廊下を歩き、階段を上がり、自室へ。

「はあ。やだなあ」

恐らく最後の最後まで見てみぬ振りをしていたかったのだろう。あえて鞆の奥にしまいつばなしにしていた紙袋と、とある厚紙を取り出す。紙袋の中には膨らんでいた。

それらを握りしめて再び入りかけていたドアのところ

まで。僕と鈴鹿川が同時に感じたとある欲求はかなり強まっていた。

「ぜったい、いつもしてることじゃんとか思ってるでしょ？ ぜんぜん違うからね？ ううう」

湿気で蒸し蒸しとする中に入ってドアを閉め、下着を下ろして部屋の中央に備えられた椅子——というには機能的な腰掛けに座り込む。

「もうやだもうやだもうやだもうやだ」

持ってきた厚紙には丁寧な組み立て方が印字されていて、それに従って折っていくと紙コップになる。

「確かにね？ いつもすることだよ？ いい加減私も慣れたというか諦めたし……。でもこれはなんとなくやだ！」

何も言わないでさっさとしてくれば、僕もこんなに意識することは無い！ なんて訴えても遅いんだよね。

「黙っててね、絶対黙っててね。今三峰くんはいないの、いなくなっただから……。ここにはえな一人、えな一人だけ。えなだけなの」

作りたての紙コップを恐る恐る足と足の付け根にあてがい、ぎゅっと目を瞑る。

「だめ、三峰くん、見ちゃやだ……。なんでそんなにドキドキしてるの、気持ち悪いよ……」

鈴鹿川がいつものことと言いながら殊更に意識するか

ら、気にしないつもりだった僕も意識せざるを――

『さて鈴鹿川、採取するのは途中のだから今あてがうのは、』

「黙っててって言ったのに、あつ、ん、で、でちゃ――」

さっと避けられる紙コップ、そして、いつもよりも痺れる解放感。

「んっ、はあぁううう」

「そろそろ、採らなきゃ……」

「ううう、やっぱこんなの、恥ずかしい……」

「えな健康だもん」

「こんなのしなくたって、だいじよぶだし」

「もお、三峰くんの、ばかぁ……」

採取後、廊下に出たときとても涼しく感じたのはその部屋が蒸し暑かったからか、単に僕らが異常に火照っていたせいか。

約五分間の戦いの成果を手に、

「シャワー浴びる」

とつぶやく鈴鹿川の声は、ひどく震えていた……。

僕は謝ることしかできなかった。

5ねんごびゆあぶりーど

「マネージャー、お茶」

数分後、柔らかな湯気の立つ湯呑みを差し出す……俺。
「お菓子も取って」

備え付けのバスケットに入っているチョコやビスケットを一つ二つ取ってそつと彼女のそばに盛ると、さつと自分の前まで引き寄せ、もくもくと食べだした。

「で、さ。今日のスケジュールだけ」

「わたしもう知ってる」

ずず、と茶をすすする音だけが簡素な楽屋に響く。

「なあ茨、最近どうだ？」「何が」

「学校とか、友達とか」

「ふっー」というか、マネージャーには関係ないでしょ」
話題を失った俺はちよつと離れた席に腰を落ち着け、
眉間を手のひらで覆った。

俺の些細な疑問、だけど大きな不安に気づくよしもな
く彼女は間食に興じている。

きつと彼女にとって素の態度なのだろう。今日だけの
悪態じゃないのは、最近の不機嫌さから明らかだから。

「そうだ、マネージャー……」

「なあ、茨」

「明日のことなんだけど」

「もうーぶろりゅーさーって、呼んでくれないのか？」

「ぶろりゅーさーなんて今更恥ずかしいのっ!!」

机と茨の悲鳴が空気を震わせた。

「いばらもう何歳だと思ってるゆっ、思ってるの!? 十五だよ!!」

真つ赤に腫れた目と、真つ赤に腫れた両手と、叩かれて
てくれたお菓子と。涙。

「もう子供じゃないんだから!」

椅子を押し倒して飛び出ていく茨。

「どこへ行く!」

「ちよつとストライキ!!」

まるで茨の激情浴びたように唸ってドアは閉められた。
最近、というわけでもない。数ヶ月前からよそよそし
さはあった。それがここ数日になって他人行儀、いや突
き放すようになっただけのこと。

きつとししゅんき。と大人の関係性はこれが正しいの
だろう。数年前の恋慕めいた慕われ形がそれこそ異常。

気の迷い。若さ故の。盲目だっただけなんだと思う。

アイドルと、そのマネージャー。きつとこれが正しい
関係性なんだろう。俺も一線を敷いた関係を望んでいた
のだから。

俺の心臓に棘打つように、寂しさだけが残留していた。

* 1 *

女の子が好き。

いわゆる《物心》が自意識のことを指すなら、きっと私は物心がついた時から女の子が好きだった。

自分と違う性別の男の子よりも、自分と同じカラダの女の子に行動も生活も気持ちも委ねた方が心地よいに決まっていた。

そもそも男女という性別で隔てられ、教育も生活の場も区切られていくのだから、同じ時間をより長く過ごす女の子の方が共感するのは当然じゃないかしら？

だって兄弟はみんな女の子。私は四姉妹の末っ子で、当たり前のように女の中で生活してたもの。

男の子はもちろん、女の子にも慕われて。まるでフィクションの世界のお姉様みたいに扱われることも、まるで普通だと感じていたわ。

……これは、言い訳。

県境を三つも跨いだ土地に追いやられた私が、自分を正当化するために並べている慰め。

本来入学するはずだった地元の名門校への道は、家の体裁のために閉ざされた。

こんな言い方だと親や家が悪いみたい。

私、緒方千豊は女の子に恋をしていた。

自分にあって、だけど自分じゃないもの。同じカラダなのに私にはないものを求めて——ある後輩を恋人にしていたの。

告白されたのは私。

手紙で呼び出され、さめざめと涙を流しながら絞られた愛の言葉はギリギリのところまで普通の世界にとどまっていた私を容易に、いとも簡単に、赤子の手をひねるように引き込んだ。

こうして私は初めての恋人をもった。

今まで異性から飽きるくらいに求愛されることはあっても、同姓はさすがに初めてだったわ。

半ば恋愛感情めいたスキンシップやお付き合いはあつたかもだけど、はつきりと好きって言われるのは、とても新鮮で、気持ち良かった。

どんな異性も同じにしか見えなくて断り続けていた私。初めて女の子に愛を捧げられて、ああやっぱり緒方千豊は女の子が好きなのだと自覚したわ。

「センパイっ！　こんなの、こんなの迷惑だとわかってます！　でも、はじめて見たときから、ずっと、ずっとセンパイのことが好きでした……！！　いや、ですよね。」

女の子から告白されて。でも、言わないと、もう自分のこと、抑えきれなくて……。でもこれで、すっきりしました。わたしのわがままのために、わざわざ、ぐす、来てもらって、ありが、……。ごさい、ました」

その嗚咽混じりの告白をイヤだなんて、誰が言えるかしら。世間からすれば間違った感情だと自覚した上で、どれだけの勇気を集めれば踏み切れるのか。

少なくとも私にはできないわ。

自分も、相手も苦しめるだけの間違った恋。

茨の道を歩むとわかっているから。でも。

自分に嘘をついた歩き方をするよりは、いいと思った。

それからの日常は、劇的だったわ。

何もかもが新鮮に感じられた。

たった一人、自分が素直になれる相手がいる。

誰にも言えなかった気持ちを告げられる子がいる。

ココロも、カラダも委ねられる恋人がいる。

お話して、手を繋いで、デートして、お泊りして、一緒にお風呂も入っちゃって、キスして。

あの子と重ねた唇の数だけ、女の子を知っていく。

息切れするまで口を塞いだ直後のあの娘の恍惚とした表情、上ずった嬌声、あたたかい吐息……。

もうなにもかも可愛くて。

虜になって。囚われて。深みにはまって。受験生だったのに抜けられなくて。卒業したらあの子と離れ離れになっちゃうし、いっそ留年しちゃおうかしら……。でも同じところに住んでるんだし、いつでも会えるんだから帰にすることでもないのかな、なんて。

彼女との甘い生活を謳歌できていたのは卒業式当日までだった。

遂に親にバレてしまったから。

バレた。いつまでも続けられる、誰もが認める日常でないことはわかっていた。どこかで見切りをつけるか、それこそ明かすか、神経をすり減らさずと隠すしかなかったのだから。

名家の末っ子としての将来を期待していた両親はひどく落胆しただろう。そして自慢の娘が家のたんこぶとなつた事実を目を背け、私を島流しにした。

体裁もあつただろう。そして、それ以上に無理矢理に私を『なかつたこと』にしたかったのかもしてない。

挨拶することもできずあの子と離れ離れになり、私は裏口入学のような形で遠く離れた高校に入学させられた。もう、これっきりにしよう。

これからは真つ当な恋をしよう。男の子に恋をして、

男の子を愛して、誰もが認める愛を知ろう。

それでもすぐには踏ん切りがつけられなかった。積極的に男の子と関わろうと思うけど、女の子とばかり接していた私はどう話せばいいかわからず、怒涛の勢いで寄せられる告白をどうすればいいかわからず、やっと落ちて着いて男の子とコミュニケーションが取れるようになるまで一年間。

女の子に依存したカラダを矯正し、いざ望んだ二年生。そして私は、一人の女の子と出会った。

流星物質 MeteorGraphy

小説 珠洲鈴涼理

イラスト のの あんひる 朱 きゃっと

文芸サークル『流星ハートビート』

2014年 5月 5日 第1刷発行

初出イベント 第十八回文学フリマ

★価格は500円以下にします

発行者 珠洲鈴涼理

印刷所 ちょ古っ都製本工房

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律や発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になるらしいです。
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
いかなる場合でも一切認められませんのでご注意くださいね。
造本にはちょ古っ都製本工房さんに十分注意してもらっておりますが、
乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。
まずは購入されたイベント名を明記して発行者にご連絡ください。
在庫があれば送料は発行者負担でお取り替え致します、多分。
但し、よくわからんところで購入したものについてはお取り替え出来ませんよ。
決まりを破る読者は星になれ？
